

再生

第二章 閉じられた^{むげん} ∞



4 長いメール

ーやがて夜になり、全てが闇の中に沈む。
私は船首で膝小僧を抱えて真っ直ぐに前を
見ている。船は小さな漁船だ。料金を取っ
て人を乗せてはいけない船だ。海の白タク。

乗客は密航者。行く当てのない密航者。男が指さした――

「あれが月島だ」

確かに小さな明かりが見える。私は男の名前を聞いた。

「名前はない」

重ねて聞いた。

「新吉やけ」

海の男は渋々名乗った。いつの間にか満天の星が海に降り注いだ。

く入り江の目立たない場所に船を浮かべ、同志からの合図を待つ。く

く船に仰向けになり、空を見ている。私の上に無数の星がある。

今は、一九七十年十月二十九日。少し寒い。新吉はともて海を見つめている。本当に無口な男だ。

こうして海に浮かび、夜空を見ると、とても切ない気持ちになる。時々涙がス――

と頬をつたう。

祐介はこの島に帰ったはずだ。

至急に、来島、願う。事態は切迫している。頼む人は君しかない。

「至急に、来島、願う。事態は切迫している。頼む人は君しかない。」

手紙を海にそっと流す。しばらく漂い、波間に、ふっと、消えた。小さな嘘。

新吉に話しかける。

「いつまで待つのか？」

「あそこに灯りがつくけ」

山腹を指さしながら、また、同じ返事が返ってくる。

父は開業医だった。中流家庭というところかなあ。苦勞知らずで大きくなった。だが、いつも心の中は空虚だった。空っぽだった。そんな事を言えば、多分大人達は口

を揃えて贅沢だと言う。絶えず死に直面していた戦争中を考えろ、空腹を考えろ。広島、長崎を思え。でも、実感するものとしての戦争も、空腹も、広島も、長崎もなかった。

理解不可能な他人ばかりがいた。父や母もその中の一人だった。

大学は、父が薬剤師がいいだろうという事で決まった。特別に反対する理由もなかった。父は、顔もスタイルも悪い私は、嫁に行き遅れても資格があればと思ったのだ。

私はいつも階段教室の一番前の席にいた。

教授の講義は聴き取りにくく、ものすごく退屈だったが、ここにいれば落ち着く事が出来た。一列目のメンバーは決まっている。私以外はみんな眼鏡をかけた女だ。

また、亜里砂からメールが入った。

ー合図があった。一九七十年十月二十九日。もうすぐ祭りだという。太鼓の音がする。亜里砂。ー

四十年前の海に亜里砂は浮かんでいるの
だろうか。過激派フリーク……。ネットで
調べてみると、少し似ている気もする。

亜里砂からのメールが終わると、Kから
のメールが届いていた。命乞いかな。この
時、Kのメールから開いていれば。最後の
メールから開いていれば。

@花子はどうするの。

知らない。↓返信

最初はそう言う科白で始まった。

Kのメールは1行ずつ次々に送られてく
る。乱打だ。キーボードの乱れ打ちだ。

@僕はね、T大の医学部を卒業したんだ。

@最初は誰でもそうだろうと思っていた
けど、違うらしい。

@僕はカメラ。

@本のページをそっくり頭の中に写し取る事が出来る。理解は出来ないけど。

@ほとんどの学科は満点。

@でも、数学は出来ない。

@数学は公文式だ。これでいけた。

@僕は自分が生きているという事が希薄だった。

@今でも。

@医学部を卒業して、解剖ばかりやっていた。

@生と死の境目を探した。

@何処かにあるはずだと思った。

死とは二度と動かない事だよ。↓返信

@私たちごっこだよ。

だったら、死んでみろよ。↓返信

@そうする。

冗談！↓返信

@そのつもりでメールをしている。

止めろよ。冗談だって。↓返信

@馬鹿は死ななきゃ直らない。

@ 花子は死んだよ。

@ 僕が殺した。

@ 僕が花子にしてあげられるのはそれぐらいだよ。

@ メールは全部消しておくよ。

僕は急いで大学に電話をかけた。誰も出ない。出ないはずだ。午後九時以降は動物舎に繋がるはずだから。

@

十一月に入った。冬の予感がする。K大学の夜。

偽学生のこととはあの時から聞かない。亜里砂は四十年前に帰って行ったのだろう。メールも途切れた。

便所に行く。旧帝大の廊下は暗く長い。

今度の学生はとてもフレンドリーだ。「おなり」なんて言わないし、きっちり敬語も

使う。「飲みに行きませんか」と、誘われて、居酒屋で飲んだこともある。

メールの到着音。小便をしながら、携帯電話を開ける。久しぶりの亜里砂からのメールだった。

「着いたよ。あなたに会える」

「君は誰？」

「百年経てば会えるかも知れない」

「百年なんて、一瞬じゃない」

やがて僕と亜里砂の境目がなくなる。

月島……。そこで亜里砂と出会う。水面に落ちた小さな葉っぱが少しずつ水紋を広げるように物語は始まっている。